

さざなみ 国語教室

さざなみ国語教室

第522号 2025年 9月25日

発行者代表 吉 永 幸 司

連絡先 大津市柳川2-11-5

TEL 077-522-1008

発行所 滋賀児童文化協会

NPO 現代の教育問題研究所

知ってるつもり

大西 宏史

先日、「ハムレットって知ってる？」と聞かれました。「知っていますよ」と答えると、「どんな内容？」と問い返され、答えに窮しました。これまで原作を読んだことがなく、タイトルしか知らないことに気づかされたのです。これを機会に読んでみたいと思い、本を手に取りました。時代背景や文化がちがうので、内容が入りにくく、読解力の至らなさに悩まされましたが、時間をかけて、何とか読み終えることができました。

三宅香帆さんの著書「なぜ働いていると本が読めなくなるのか」集英社新書に、「ノイズ」という

言葉が出てきます。「ノイズ」とは、こちらが予想していない内容に出合うことです。読書には、「ノイズ」が含まれており、これらの「ノイズ」が知識となり、教養となるとされています。一方、自分が知りたいことだけを手に入れるのは、偶然性がなく、「ノイズ」も含まれていないので、知識として定着することがなかなか難しいと述べられていました。そう考えると、先ほどのハムレットも、ネットを見るとあらすじが書かれているので、内容は把握できます。ただ、なぜハムレットは父親の

仇を取るために、奇抜な行動に出たのか、他に方法はなかったのかということは、本を読まないと考ええることはできません。たくさんの「知ってるつもり」から、一つのことを「知る」大切さを「ハムレット」から学んだ気がします。

「みんなで話すと正解はひとつじゃないってことがよくわかる。」という標語を見ました。ある日、学習の様子を見に行ったところ、「〇〇さんって、都道府県のことをよく知ってるよ」と教えてくれた子がいきました。仲間の良さや得意なところを見つけ、伝えてくれる優しさに心が癒されました。私たち教職員は、「となりの子が、どんなことを考えているのかな」と思える子たちになってほしいと考えています。そのために、毎日の授業を通して、相手の考えを聴いたり、自分の考えを相手に伝えたりする時間を大切にしています。

標語を心に留め、これから、となりの子のつぶやきに耳を傾けられる雰囲気醸成していきます。

(上牧町立上牧小学校)

さざなみ

▼出張で教室を不在にした翌日、複数の先生から同じ子について報告を受けました。「注意しても反応が薄い」「等、どの先生からも似たような様子が見えらるる」が、その子の姿が浮かび、担任として、「またか」という思いと、「なぜ自分がいけないか」に限って」という気持ちが交錯します▼けれどもそれは、日頃の指導がその子に届いていなかったか、心に響いていなかったかという現実と向き合う機会でもありました。形式的な注意になっただけでなく、自分の指導を見つめ直す、貴重な機会でした▼同時に、「あの子か」と言われ続ける子どもたちの立場にも、想いを寄せずにはいられませんか。何度か同じような指導を受ける中で、「あなたはダメな子だ」と無意識に伝えてしまっていないか。子どもが心を閉ざすこともあるからです▼出張明けの翌日、大切にしたいのは、「あの子」と思ったときの最初の対応です。すでに十分に注意や指導を受け、不満を抱えていることも考えられます。まずは、心の回復を大切にしたいです。

一方で、不在中に学級を任せる先生には、予想される子どもや日頃の対応の仕方などをメモで伝え、同じ注意などの繰り返しや重ならないことへの配慮です▼日頃から積み上げてきた、教師と子どもとの信頼関係、そして教師間の連携の姿が見えてくるのが、出張の日、そしてその翌日なのです。

(吉永幸司)

はじめての詩

「イメージをふくらませて

山田 定子

入学している人のお話を話せるようになり、少しずつ書くことに慣れてきた。「あのね」と、先生や友だちに話しかけるように簡単なお話が書けるようになつてきた。

そんな頃、保護者の方から、家で栽培している野菜で、かわった形のを届けてくださった。三つ股のニンジン、まがつたきゅうり、細長いピーマンとししとう、かわった形のじゃがいもなどを見て、子どもたちはとても喜んだ。じつと見つめたり、さわったりして、思ったこと、感じたことを口々に話し始めた。

【にんじん】

「足がくねくねしている。」

「足が三本で宇宙人みたい。」

「ダンスをしているみたい。」

「根っこがひげみたい。」

【きゅうり】

「おしくらまんじゅうしたみたい。」

「くにとまがつている。6ミ

「たいな形。」

【びいまん】

「顔みたい。」

「しわがある。」

【じゃがいも】

「ハートみたいな形。」

「くにやくにやのまがつた形。」

「そこで、この思いや感じたこと

を「あのね」として先生や友だちに話しかけるように書くことにした。どのように書けばいいか、ととまどっている子には、どんどん書き進めている友だちのお話を聞くことで、書き方がわかり、どの子も書けるようになった。

あのね

にんじんが はたけでできたよ。

あしがさんぽんでくねくねしてくねくねにんじんみたい。うちゅうじんみたいでたのしそう。ぼくもいっしょにおどつてみたい。

あのね

じつはね。はたけのきゅうりがまがつていたの。もしかして、かすきがきたからじしやくみたになつたのかな。からすをちかづけられないようにするためかな。きゅうりが、おしくらまんじゅうしたのかな。

実際に、自分の目で見たりさわったりしたこと、自由な話し合い、友だちの意見も聞いて、イメージをふくらませやすかつたのか、どの子も、楽しいお話を書くことができた。おうちの方からも、子どもたちのお話に「よく見ていたね。」「いろいろなことが想像できたお話だね。」

「楽しいお話が書けたね。」

「この感想がよせられた。」

「このような活動をくり返し、「書くことが好き」と言える教室にしていきたい。」

(東近江市立湖東第一小学校)

子どもたちの素朴な疑問

川部 長人

一年生と国語の授業をしていると、子どもたちの素朴な疑問がたくさん出てくる。その疑問の中には、授業を生き生きとさせるものもたくさんある。今回はそんな事例を二つ紹介する。

①登場人物は何びき？

九月に入り、『やくそく(光村図書一年生上)』の学習をしている。単元の初めに、登場人物の確認を行った。子どもたちから「あおむし」や「おおきな木」が登場人物だという発言があつた。そこで「あおむしは何びき出てきましたか?」と聞いてみると、三びきと六びきという意見が出てきた。あおむしは、三びきしか出てこないのだが、六びきの方の意見としては、教科書104と105ページの挿絵を見て、「六びきの絵が描いているから」という意見が出てきた。そこで全体に「出てきたあおむしは三びきか、六びきか?」と聞いてみると、子どもたちの意見は半分ずつに分かれた。この教材は、それぞれのおおむしたちに名前がなく、そこも子どもたちの読みを難しくさせているのではないかと思つた。そこから、子どもたちの方から「もう一度、文章を詳しく読んでみよう」という意見があつたので、それぞれでもう一度文章を読み直してみることにした。読み直してみると「あおむしは文章の中で、さんびきめまでしかでてこない」や「104と10

5ページの絵は違う場面の絵だから、三びきしかでてきていない」という意見が出てきた。授業が終わった後の休み時間にも、文章を読み直して確認し続ける子どもおり、自分たちの持った疑問は子どもたちを主体的にさせるのだとあらためて感じた。

②漢字に「ナ」は付かないの？

夏休みが明け、一年生でも漢字の学習がスタートした。子どもたちは漢字の学習がすごく楽しみなようで「早く自分の名前の漢字を習いたい」と言っている子もいた。一年生で初めて習う漢字は「木」という漢字であつた。練習の中で「なえぎ」の「ぎ」を漢字で書く場面があり、「木」という漢字に「ナ」を付けている子がいた。なぜこの子は「ナ」を付けているのか不思議に思い聞いてみると「ひらがなの時はナを付けるのに、なんで漢字はナを付けないの?」という疑問が出てきた。この疑問に対して、上手く答えることができなかった。「漢字にはナは付けない」という説明だけになってしまつた。読者のみなさんなら一年生にどのように説明されるか、ぜひご意見をお聞きたい。

今回は二つの事例を紹介したが、普段の授業の中で一年生はたくさん疑問を出してくる。その疑問に対して、私もとても考えさせられることもあるし、これからも子どもたちと悩み・楽しみながら授業を進めていきたい。

(湖南市立菩提寺小学校)

『漢字の間違いさがし』

井上 混斗

二学期が始まり、数日が経ちました。私が担任する二年一組の子どもたちは、毎日元気に登校し、少しずつ学校生活のリズムを取り戻しながら、一生懸命に学習に取り組んでいます。

特に、新しい漢字の学習に熱心だ。今年度の新出漢字の指導では、「間違い探し」の学習法を一学期から続けている。私がわざと一画足りない漢字や、「とめ・はね・はらい」が抜けている漢字、間違った書き順の漢字などを板書し、子どもたちが正しい書き方を考え、見つけ出すように指導している。

子どもたちは「間違い探し」の指導を続けるうちに、「井上先生はどんな間違いをするんだろう?」と考えるようになった。そこから、子どもたちに次のような変化が見られるようになった。

【止め、はね、はらいを意識】

まず、子どもたちは「とめ・はね・はらい」を意識するようになった。「紙」という漢字を教えた際、隣の「氏」をはねずに提示してみた。すると、多くの子どもたちがすぐに間違いに気づき、手を挙げて指摘しようとするのができた。ある子どもは、提示した瞬間に「やっぱりな」とつぶやき、隣の友だちと間違いの部分について話し合っていた。

次に、「糸」という漢字の六画目を止めずに提示しました。すると、初めは「え、どこ?」とお手本と見比べていたが、すぐに間違いに気づくことができていた。

【バランスの意識】

「間違い探し」の指導を続けていくうちに、子どもたちは漢字のバランスを意識して書くようになっていった。

二年生になると、「新出漢字」には偏と旁があるものが増えた。そのため、次のような間違いに苦戦する子どもが少なくなかった。

- ・偏もしくは旁が大きすぎる。
- ・「土」のように短い画と長い画の長さが逆になる。
- ・始筆をどこから始めるかわからない。

そこで、わざとバランスの悪い漢字を提示するようにした。すると、子どもたちは「同じ間違いをしないようにしましょう」と意識するようになり、バランスを考えて書くことができるようになった。今では、子どもたち自身で「頭でかち」といったように、間違いの種類を分類して話し合う姿も見られる。

「間違い探し」というゲーム感覚の活動を通じて、子どもたちは受け身ではなく、積極的に間違いを見つけないと能動的な学習姿勢を身につけているようにも感じられる。

(豊郷町立日栄小学校)

ことばでみちあんない

岡嶋 大輔

「ことばでみちあんない」(光村図書二年上)を扱った学習。何かを説明するとき、「相手に伝わりにくい言葉を使っているうちに使っているかもしれない」というように、自分の発する言葉について振り返ることの機会になればと思い学習を進めた。

設定は、児童が待ち合わせの場所を友達に電話連絡してもらおうというもの。各々が教科書にある「公園の地図」を見ながら、友達役である私の道案内を聞き、指で地図を辿っていく。道案内は次の通り。

「公園の入り口から入って、まっすぐ行ったら、ばら園があるよ。しばらく行ったら、右に曲がって。そこにあるベンチで待っているね。」

地図には分かれ道がいくつかあり、ベンチも四つある。この案内でどのベンチにたどり着いたのか児童に聞いてみると、見事にバラ園にたどり着いた。道案内が「分かれにくい」といった声もあがった。そこで、道案内のどの辺りが分かれにくかったのか聞くと、「しばらく行ったら」と「そこにある」という二か所が「どこまで行った」というのか「そこ」というのはどこののか「分らない」ということで皆が一致した。では、その二か所をどのような言葉にすればよいのか、この道案内をそのまま文字にしたワークシートを渡し、修正した言葉を考えて書き込むようにした。児童が考えた言葉は次の通り。

『しばらく行ったら』の修正

- ・一つめのかどを
- ・右を見てすすむと分かれみちがあつて、そこを
- ・四かきいやねのトイレのあるかどを
- 『そこにある』の修正
- ・トイレの前にある
- ・大きな木のてまえにある
- ・すぐに左に見える

トイレも二つあるので、その区別をしたこと、「かど」「わかれみち」「てまえ」等の場所を表す言葉を上手に使ったこと、どれも、相手が見えている景色を思い浮かべてその人の立場に立って言葉を選んでいったことをほめた。

最後に、「分かれやすい道案内のポイントは何か」と問うた。児童からは、

- ・近くの「めじるし」を言う
- ・めじるしの「形」を言う
- ・まがるかどが「いくつめ」なのかを言う
- ・左、右、まえの「どちら」に見えるかを言う

といったことが出された。次時には、前述の地図上で各々が決めた目的地への道案内を考え、グループで道案内を合意した。相手に分かりやすいようにと意識して道案内ができていたものが多かったのは嬉しい。

単元の始めに「分らないさ」を実感し、その原因を具体的に探り、よりよいものにするために修正を考え合ったこと。そして、出し合った修正を「ポイント」として端的な言葉でまとめたこと。それらが、児童にとつての分かりやすさに少しはつながったのではないかと思う。

(野洲市立北野小学校)

知は現場にある

高木 富也

私事で恐縮であるが、八ヶ月間の育児休業をいただいた。これまで仕事や研究ばかりに没頭してきた自分にとって、大きな挑戦であったといえる。日に日に成長していく我が子を愛しく思うと同時に、「育てる」という行為の難しさを感じた。少しずつ喃語が増えていく様子、意思疎通ができる喜び、伝わらないもどかしさ…。教育の根幹に触れたような体験であった。今回の育児休業を通して、児童理解や保護者理解に大きく繋がったと感じている。育児休業の選択を応援してくれた家族、職場、仲間に改めて感謝を申し上げたい。

育児の合間をぬって、自身の実践を振り返ったり、原稿や論文にまとめたりする機会があった。可能な限り、県外の公開授業や研究会、学会に足を運んだ。その中で印象に残っているのは、第百四十八回全国大学国語教育学会(三重大会)のシンポジウムだ。「国語教育の【知】はどこにあるのか?」という討論会が行われた。非常に難しいテーマである。

話題の生成AIに尋ねてみた所、「国語教育の【知】は、単なる言語技能ではなく、人間として生きる力を育む知です。その所在は学校だけでなく、家庭・地域・社会文化に広がり、理論的には教育哲学・言語学・社会学などと連携しながら深化しています。」と回答された。わかるような、わからないような、スッキリとした納得は得られない。

大会の討論内容も、自分にとっては内容が難しく理解しきれなかった。しかし、一つだけ印象に残っている言葉があった。それは、「知は現場にある。」という考え方である。これは、光文社新書のキャッチコピーとして紹介された。

「知は現場にある。」多くの教師にとって、現場とは学級をイメージするだろう。これまで教職歴11担任歴だった自分にとって、学級と子どもたちがいるのは当たり前、その状況であつたし、そこに疑問をもつこともなかった。しかしながら、育児休業という期間は、目の前に我が子しかいない。(育児という現場ではあるが。)国語の実践がしたい!と思っても、その現場がない。改めて、学級がある

ということ、日々子どもと関わること、授業実践ができるということ、現場は、特別なことなのだと感じた。

理論が、研究者の中だけで論じられたり、机上の空論であつたりしてはならない。実践が、現場の熱量や教師の個性だけで進められてもいけない。重要なことは、理論と実践が往還されていくことなのだと思う。理論が現場に「知」として取り入れられることで、実践がより深く意味のある物になる。実践で得られた「知」を理論化することで、他の現場でも活用できるよい実践になっていくのだろう。現場の教師である我々は、様々な教育政策や教育課題に必要以上に振り回されるのではなく、それぞれの現場で出会う目の前の子どもを大切に、日々の授業の中で磨いていく「実践知」こそが、重要なのではないだろうか。

「知は現場にある。」育児休業から現場に復帰した私は、4年生の担任となった。目の前の子どもたちと生み出す「知」を磨いていきたい。

(東近江市立能登川南小学校)

編集後記

▼七月例会
(五二〇回)
は7月26日

第13回近江の国語実践研究大会(草津市・キラリエ)研究主題「主体的・対話的で深い学びのある学習活動づくり」に参加。▼分科会Aでは「くじらぐも」を提案者・川部長人さん(湖南市立菩提寺小)実践協力者・北川雅士さん(県総合教育センター)、分科会Bは「ごんぎつね」を提案者・柴原茜さん(滋賀大学教育学部附属小)実践協力者・川那部隆徳さん(栗東市立大宝東小)で協議。▼吉永幸司先生からは研究主題に沿った具体的な指導の講話をいただいた。▼八月例会(五二一回)は8月3日第50回国語研究集団合同研究会(奈良女子大学附属小学校)研究主題「これからの国語教育の在り方を考える」に参加。▼「さざなみ国語教室」から少徳信さん、彦根市立高宮小が「子供たちが学びを自分ごとにし自覚するための問い」づくりを提案。指導助言・蜂屋正雄さん(野洲市教育委員会)司会・三上昌男さん(滋賀県教育センター)▼「風の会」の西勝先生(関西大学)は「低学年」の子どもたちにとって論理を読むとは「題で、説明文指導では、内容理解偏重でなく、機能的・実用的な読みの技術こそが、一つ上の力」なのだと教材を取り上げ、ご提示いただいた。▼「竹の会」は「個別最適な学びの価値と実践における課題」のテーマで5名のパネラーが協議しました。▼来年度は滋賀県での開催です。実践の歩みをより確かにしてゆきたいものです。▼巻頭には大西宏史様から貴重な言葉を頂きました。感謝。(森 邦博)